

近代中国における谷崎潤一郎の受容研究：中華民国期の「翻訳」を視座として

陳, 竹

<https://hdl.handle.net/2324/7182548>

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（学術）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 陳 竹

論文名 : 近代中国における谷崎潤一郎の受容研究
— 中華民国期の「翻訳」を視座として

区 分 : 甲

論文内容の要旨

谷崎潤一郎は、少年時期から中国文化に多大な興味を持ち、生涯を通じて中国との関係が深かった作家である。1920年から40年代にかけ留日経歴を持った中国文化人によって多く翻訳・紹介されたことで、谷崎の作品は、近代中国文芸・映画の発展にも少なからぬ影響を与えていた。そのため、谷崎と近代中国文化人との交流・往来も注目されるところとなっている。

これまでの谷崎と近代中国との関わりについての研究において、谷崎の中国旅行、中国を主題とした作品群に現れる中国趣味、上海文壇で活躍していた近代中国文化人との交流、そして中国唯美派作家による谷崎文学の受容などが注目されていた。しかし、上海以外の地域、例えば当時の東北、北京文壇における谷崎文学の翻訳状況及び受容実態に関する検討、また唯美主義以外の異質な作品の中国語訳に対する関心などの課題には、まだ問題点が残っていると考える。

そこで本論文は、中華民国時期(1912～1949)に発表されていた谷崎作品の中国語翻訳に焦点を当て、特にこれまでの研究において看過されていた翻訳作品についての調査と分析を行う。研究目的としては、近代中国における谷崎文学の受容と、翻訳作品群を通じてみる谷崎の作家イメージをより詳細かつ包括的に提示することである。

本論文は4つの部分から成り立ち、8つの章で構成されている。

第1部「“モダニズム作家”としての登場」では、1920年代に中国語に翻訳された谷崎の「金と銀」(穆儒丐訳、1924年)と「麒麟」(穆儒丐訳、1924年)を取り上げ、近代中国文芸の発展におけるその2篇の位置付けと意義について検討を試みる。第1章「犯罪心理小説「金と銀」の中国語訳」では、穆儒丐による「金と銀」の中国語訳を詳しく調査し、1920～30年代の東北文壇における谷崎文学の受容について考察する。また1920年代末から上海、東北に興起したモダニズム文学の風潮に加え、近代中国文学の発展における「金と銀」の位置付けと影響も併せて検討する。第2章「歴史小説「麒麟」の翻訳と穆儒丐による「四皓」の創作」では、『史記』に取材した「麒麟」と「四皓」(1924年)の比較を行う。穆儒丐が「麒麟」を谷崎文学ないし日本文学の代表作として、早々に中国語に翻訳した意図を検討しながら、同年に発表された彼の歴史小説「四皓」における「麒麟」の受容についても論じている。第1部の分析を通して、谷崎が中国でデビューした際の“モダニズム作家”としての側面が浮かび上がってくると考える。

第2部「“反道徳”の日本作家」では、この時期に最も多く発表された谷崎作品である「麒麟」の中国語訳について詳細な考察を行う。第3章「1920年代末の「麒麟」中国語訳」では、「麒麟」が当時の中国知識人に注目された理由、つまりその翻訳の背後にある背景に焦点を当てる。続いて第4章「中国語訳「麒麟」のバージョン問題」では、7種の「麒麟」の中国語バージョンに対して実証的な調査を進める。第2部の考察から、「麒麟」が近代中国で重要視されていた要因、また頻繁に翻訳されていたという事象に反映される“反道徳の作家”としての谷崎イメージも窺える。

第3部「“映画人”としての谷崎」では、1929年に中国語に翻訳された「人面痘」を取り上げ、その原話、及び近代中国映画の発展との関連などについて検討する。第5章「「人面痘」の原話について」は、新たな視点から、谷崎による「人面痘」の原型が、曲亭馬琴の『新累解脱物語』に由来する可能性が高いことを提示する。更に第6章「「人面痘」と田漢が関与した映画「深夜の歌声」では、ホラー映画の「深夜の歌声」（1937年）と小説「人面痘」との比較を通じて、両作品に存在する共通性について検討を試みる。第3部の考察を通じて、近代中国映画の発展に関わった“映画人”としての谷崎の姿も微かに見えている。

第4部「“散文作家”谷崎潤一郎」では、主に1920～30年代の北京文壇で活躍していた文人たちによる谷崎作品の翻訳を考察対象とする。第7章「詩人湯鶴逸による「玄奘三蔵」の中国語訳」では、「玄奘三蔵」の中国語訳（1928年）をめぐって、当該作品が注目された要因と翻訳の背景について検討する。続いて第8章「「西湖の月」の中国語訳」では、「西湖の月」の最初の中国語バージョンである張君川訳「西湖の月」（1933年）と、広州で発表された「西湖の月」（何格恩訳、1943年）を取り上げ、翻訳と原作の異同、また添削部分に関する考察を行う。第4部の考察を通じて、「西湖の月」の中国語訳を通じて見る“散文作家”としての谷崎の作家イメージを提示すると同時に、1930～40年代の中国における谷崎文学の受容の一側面も解明できると考える。

本論文は、近代中国文壇における谷崎潤一郎の作家像及び谷崎文学の受容について、可能な限り解明したものである。